

本当の教育を見た 厳しい指導に応えるよろこび 鈴木幸一 IIJ会長

2019/4/9 6:30 | 日本経済新聞 電子版

そこまで、ぼけてはいないと思うのだが、桜の季節になると、今年の桜景色なのか、去年の桜なのか、もっとはるか昔の桜なのか、わからなくなってくる。

吉野山 こずゑの花を 見し日より 心は身にも そはずなりにき 西行



経営者ブログ

ビジネス界のご意見番ともいえる一流経営者本人が政治・経済に関する日々の思いなどを綴ります。ビジネスパーソンの生き方のヒントが満載です。随時掲載

西行とは違い、吉野の枝や幹に咲く桜を見た日から、心は、窮屈なわが身を離れてしまうことはない。桜の美しさに、ちいさなわが身にとらわれなくなったというほど、存在そのものをかけて、桜に魅入ることもないのだが、春、桜が山里や街の景色を変えてしまう光景に触れると、少しは、自らが過ごしてきたわが身の窮屈な日々の記憶を忘れ、日常とは、「そはずなりにき」となるのかもしれない。桜に限らず、人の眼に映る「美」というのは、「妖しい」はんちゅうに至るまで、人の平穏な日常など、置き去りにすることもあるが、桜の美しさは、また、別である。

薄い花びらの桜の美しさには、いつも風が舞って、なにかと思ひ悩むこともあったはずの年月が、ささいなこととして、記憶から消えてしまう時がある。ただし、日々、日常に忙殺されたままの私には、西行の歌にしても、この季節にならないと、浮かぶことがない。葉桜になる頃には、すっかりそんな思いも忘れてしまっている。毎年、似たような思いが浮かんでも、すぐに消えるだけのことである。

4月になると、すぐに入社式、新年度の事業が始まっているわけで、世事に没頭するほかない。今年のゴールデンウィークは、10日間も休みが続く。せめて、リスクを顧みず、世界の動きを離れて、10日間も休みをつくるのであれば、桜休暇として、浮世を忘れることにしたら、日本の魂を世界に訴えることができるのではないかと、意味もないことを夢想したりする。なんとも、幕末以来、外国人の心すら妖しくするのは、桜と富士の姿なのである。

つかの間の幻想のように消えてしまう桜への思いを忘れると、長く、ITの世界にいることの不確かさを感じるが多くなった。1970年代の半ばから、世界経済の成長を支えているのは、債務の増大、過剰な資金の流動による金融市場である。コツコツとすぐにはリターンが見込めない技術開発投資を続けながら、世界市場で収益を上げるプロダクトをつくり続けてきた日本企業だが、その収益だけを見ると、投資によるリターンを目指した企業と、比較にならないほどの差がある。巨額の収益を生むかもしれない「投資→リターン」のリスクこそ、大きいはずなのだが、ある閾値（いきち）を超えた額の投資によって得る利益は、営々した努力によって得る収益とは、何桁も違うリターンを得ることがある。それが実現された利益か、評価益にとどまるかは、さて置くとして、数字だけを見ると、営々と続けた努力によって得る収益との違いにがくぜんとすることがある。「競馬のリターンを見たら、当たれば、何千倍になることがあるのだから」と、やけくそのように、吐き捨てる人間もいるのだが、それもなんだか寂しい言葉である。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を楽しむ、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

インターネット接続を商用化しようと、IIJを創業してすぐ、シアトルに行き、マイクロソフトと一緒にできることをしないかと、交渉に行ったことがあったのだが、「大きな技術革新であることは間違いないけれど、技術への要求が高い一方、特許で守られてこなかった世界で、利益を追求するのは難しいのではないか。しかも、通信だけを考えると、通信インフラと通信サービスが一体となった電話の時代とは、まったく異なるスキームになることは理解できるけれど、いずれ、物理的なインフラを持つ電話会社と、不公平な競争が始まるに違いない」といった議論を長々とするようになって、何ごととも進展しなかった記憶がある。ただし、2年ほどしたら、ウィンドウズ95が出て、日本ではインターネット元年といわれるほどのモデルになった。IIJが共同で開発していた米国のストリーミングに夢を抱いたベンチャー企業もマイクロソフトに買収された。

「物理的なインフラも持たず、電話会社と競争をして、よく27年も頑張ったなあ。世界の主だったISP(インターネット接続事業者)が残ったのは、IIJだけだ。みんな電話会社に売却して、お金にしたようだけど。当時からアイデアはいっぱいあったの



朝の千鳥ヶ淵

だから、もっと軽いサービスをやっていたら、今頃、富豪になったのに」。1993年ごろ、よく付き合っていた米国の知人が、日本に来たからと、ごちそうしてくれる。食事をしたのだが、昔話をしては、静かに笑った。彼は、創業した事業会社をさっさと売却、自ら小さな投資事業会社をつくり、今度は大もうけをしたらしい。プライベート・ジェットを香港に置いてきたという。日本に遊びに来たのというのだが、遊びのはずもなく、投資の話で来たのだろうか、聞きもしなかった。「生活は変わらないの」「まだ、夜明け前に起きて、7時過ぎにはオフィスに行っているよ。貧しい時代に生まれたから、何とも思わないし、仕組みごと変えようという技術に本気で取り組む大企業もないし、面白いよ」

「変わらないなあ」。

翌朝、花見に誘う。大手町のホテルから、朝早く、千鳥ヶ淵まで桜を眺めながら散歩をした。ホテルに寄って、朝飯を食べる。「初めて、桜を見たよ。なんだか妖しい気分になるね」「ああ」「エリック・シュミットにしても、ザッカーバーグの事業にしても、25年以上前に話したアイデアだよね。どんな風に思っているの。まだ、現役を続けるの」「うーん。考えてもね。日本でやっていたし。技術者だけは、まあ、育てたけど。そんなものかなあ」。

道楽と言われ続けている音楽祭だが、「続けることだけが成功への道だ」と励ましてくれた世界的指揮者リッカルド・ムーティさんと、今年から若手演奏家を育てる「イタリア・オペラ・アカデミー」を日本で開催した。今年是指揮者が対象である。世界から130人もの応募があって、12人がオーディションを受け、4人がムーティさんからヴェルディの「リゴレット」を演奏しながら、1週間、朝から夜遅くまで、厳しく熱心な指導をしていただいた。時間の合間を縫って聴きに行ったのだが、指揮がムーティさんに代わると、音が生き生きとし、まったく異なる音楽になる。すごいものだ。天才といわれる人が、精細に楽譜を読み込み、音楽をつくる。最後の日、ムーティさんの若い指揮者に対する指導に、長い時間、付き合ってくれた若手が集まった臨時編成のオーケストラと、「リゴレット」を一般の人に向けて公演した。オーケストラの演奏が素晴らしかった。ほかの公演のために来ていた海外の指揮者が、ムーティさんのヴェルディに応えた、若い演奏家のオーケストラに感嘆してくれた。指導と指導に応えることというのは、こういうことかと、涙があふれそうになるほど、うれしかった。厳しい指摘に応えることが喜びとなるような指導が可能なのだと。



「イタリア・オペラ・アカデミー」指導の風景

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.